

Q 4 祇園橋は誰が架けたの

橋は公共物ですから、現在では造るのは国や県、市町村、あるいは法人などの公共事業として行われるのが一般的です。

その図式でいうと、天草は天領だったため、幕府が行うべきですが、幕府には庶民のために橋を架けるという発想自体なかったようすし、その意思もなかったようです。

それでも、どうしても公共事業として行わねばならない工事は、諸藩にやらせたのですから、横暴もここに極まりたりというところでしょうか。ただこれには、諸藩の経済力を弱めるという意味合いもあり、幕府にとっては、自らは金を出すこともなく、一石二鳥といった具合でした。

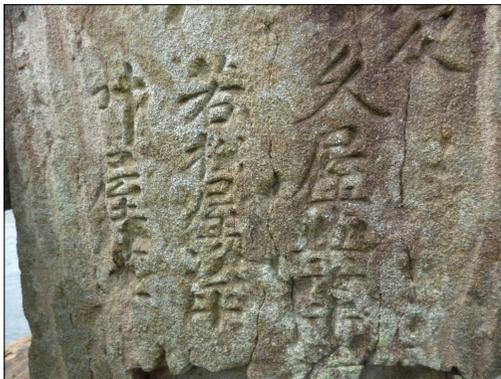
当時天草の政治の中心は、富岡町であったので、本渡などは、幕府の眼中になかったのかもしれませんが。そのため、祇園橋架橋は、幕府にとっては、必要な工事ではなかったため、正にノータッチでした。しかし、そこに住む住民にとっては、必要な橋であり、どうしても架けざるを得なかったものと思います。そのため、仕方なく、民間の手によって架橋されました。

といっても、そこに橋がなかったのではなく、木造の橋はあったものと思われまます。(木造の橋の上に土を乗せていたため、土橋とも言われていた)ただ、木造の橋は耐久性もなく、洪水のたびに流されることも多く、そのたびに、架け替えていたものと思われまます。そこで、大谷庄屋を始め、村役は、強い橋作りに一大決心をしたものと思われまます。

そして、その強力な味方が、下浦石工の存在でした。

石で橋を作ったら、ずいぶん長く持つのではないだろうか。という事で、下浦石工に頼み込んだのです。

しかし、事はすんなり運びません。いくら石工といっても、川に橋を架けるといいうのは、天草では初めてのことであり、技術的にとても大変なこと



架橋記念碑には

発起人・当村庄屋 大谷健之助

世話人 久屋與一平 若松屋次平 叶屋伊平 の名が刻まれている

で、村と石工との間に、時間をかけた交渉が行われたことは、容易に想像が
できます。

大谷健之助町山口村庄屋らから、何度も何度も、粘り強く、建設の要請を
受けた下浦石工。でも、数多い石工の中でもワシがやります、と手を上げる
人はいません。

でも、これだけ懇意に頼まれて、断わったのでは下浦石工の名折れです。

そこで白羽の矢が当たったのが、辰右衛門でした。

或いは、辰右衛門が名乗りを上げたのかもしれない。

とにかく、下浦石工の名に懸けて、立派な石橋を作ろうという事になった
わけです。（お断り・これは私の想像です）

架橋記念碑には。

石橋発起主 当村庄屋 大谷健之助

世話人 久屋興一平

同 若松屋次平

同 叶屋 伊平

の四名と資金を提供した人の名が一七八名刻まれています。

また、「惣村中軒別二百文加勢」とも記されています。当村とは、町山口
村のことですが、近在の村の人も資金を提供しています。

つまり、町山口だけでなく、近在村にとっても、この橋が必要な橋だった
ことが分かります。

世話人の人は、当時町山口村の有力銀主だと言われています。

解説 《^{ぎんし}銀主の出現》

天草が戸田領になって寛文五年（1665）郡中酒屋改めを行い、酒屋株62件が決められ
た。

この頃になると流通経済が盛んになり百姓も自給自足の生活はむつかしくなった。必要
な物資を買う必要が生まれ商業を営む者も現れた。ぎりぎりの労働を強いられている百姓
の中には酒に溺れる者を出るようになる。酒の需要は高まるばかりであった。

このような商業者、ことに酒屋を営む者たちから銀主、または徳者と呼ばれる金持ち階
級が生まれた。彼らは代金を払えないものから田畑を質に取り金を貸した。やがてその質
草は流れて貸手の所有となり、大地主に成長した。（中略）

このような銀主が大小280ほど生まれ、その所有する田畑の総面積が全郡の3分の2に
達した。勢い貧富の格差が拡大して社会問題に発展する。後に述べる百姓一揆の引き金に
なった。（『天草の歴史』天草市教育委員会刊）

（『改訂版 天草の歴史』天草市教育委員会刊 より）

Q5 建設者はどんなひと？

架橋記念碑に、下浦村石屋辰右衛門と記銘されていることから、棟梁の名前が分かかります。

下浦村とは、現在の天草市下浦町です。

この下浦村に、松室五郎左衛門という人が、宝暦年間に肥前の国から渡ってきました。彼は、白石藩の武士でしたが、訳あって浪人となり、下浦村に住みついたといえます。彼は下浦村に建造物に優れた石があることを発見し、石工となり、多くの弟子に石工の技術を伝えたそうです。

でも武士がいくら器用でも、下浦に来てから石工になるというのも、いささかおかしい気がします。もともと石工の技術を持っていたとしか考えられません。

しかし、五郎左衛門が元祖となり、下浦に石工の技術を広め、代々その技術が伝えられ、下浦は石工の里として栄え、天草のみならず島原・長崎方面まで、下浦石工の名を高めました。

現在天草にある鳥居などには、多く下浦石工の名が刻まれています。

祇園橋架橋の棟梁、石屋辰右衛門については、よく分かっています。その家が、近くの住む郷土史家の近藤鉄男さんの調査研究によって、次のような点が明らかになりました。

① 辰右衛門の家系が判明

辰右衛門の末裔が、松岡さんといって、石場地区に住んでおられ、その家に辰右衛門の位牌が残されていました。位牌には「静譽龍秀信士・辰右衛門・天保四年巳六月二日」と書かれています。また、辰右衛門の奥さんの戒名も並べて書いてあります。これは、円性寺の過去帳や松岡家の墓碑（法名塔）



松室五郎左衛門の墓
左は古墓？

天草市指定文化財

下浦石工元祖

松室五郎左衛門の墓

指定年月日

昭和五九年一月九日

管理者 石場区



五郎左衛門は、元肥前国白石の藩士でわけあって浪人し、宝暦十年（一七六〇）頃天草に来て、当地に移り住み石工となった。その後島民に石工技術を教授石工業の発展に寄与し天明三年（一七八三）に没した。近くの山中には明治一八年（一八八五）花岡大明神が祭られ毎年祭礼も行われている。

天草市教育委員会

（松室五郎左衛門の墓案内板より）

に刻まれているものと一致しました。

② 辰右衛門の二代後から苗字を名乗る

辰右衛門は、祇園橋の架橋記念碑に「下浦村 石屋 辰右衛門」と刻まれているように、苗字を有していなかったが、二代目から松岡姓を名乗っています。

③ 辰右衛門の墓も存在していた

辰右衛門の墓は、天草石工元祖の松室五郎左衛門の墓がある石場共同墓地の一角にある。その墓は、普通の石塔と違って、人形墓です。高さは60cmの坐像石仏で、蓮の花を左手で肩にかざしています。

かつて辰右衛門の石仏の下に仏石や台石が重なっていたようですが、松岡さんが、納骨堂を建てた際、掘り返した穴に埋め込んでしまったそうです。仏石には、辰右衛門の戒名が刻まれていたそうです。松岡さんは、辰右衛門が祇園橋を作った棟梁であることを薄々知ってはいたが、偉い人とは知らなかったようです。残念なことです。先年訪れた時は、人形墓は古いものでしたが、現在は造り変えられて、新しくなっています。また、辰右衛門の生年や享年は判明していません。

④ 妻について

辰右衛門の妻は、「冬覚妙仙信女」との戒名で、残念ながら俗名は書かれていません。亡くなったのは、天保十三年十二月二十六日です。

⑤ 五郎左衛門と辰右衛門の没年に五十年の開き

五郎左衛門が亡くなったのは、天明三(1783)年。辰右衛門は天保四(1833)年に亡くなっています。つまり兩人の没年には50年の開きがあります。二人の享年は分かっていますが、辰右衛門が五郎左衛門の直弟子



写真右 祇園橋架橋記念碑に刻まれている、「下浦村 石屋辰右衛門」の文字。やや摩耗している。

写真中 石場地区共同墓地にある辰右衛門の墓。(新しく造り変えられている)

写真左 松岡家の墓の法名塔に書かれている、辰右衛門と妻の法名。

である可能性はありませんが、二代目又は三代目の弟子であることは間違いないでしょう。

祇園橋竣工が、天保三年ならば、完成を見届けて、また五年ならば、完成を見届けないままこの世を去ったことになりませう。

辰右衛門が、これほどの名工ならば、他にも後世に名を残すような仕事をしていると思いますが、他には残っていないようです。

以上『潮騒』天草文化協会 平成10年発行の「下浦石工、辰右衛門の墓見つかる・へ参考」本渡祇園橋建造主の苗字は後に「松岡」 近藤鉄男著 を参考にさせていただきました。

なお、この建設の様子を歴史戯曲として、地域史研究者の鶴田文史氏が「祇園橋架橋物語」を書かれています。

(収録『西海の心 天草歴史文芸作品集』 鶴田文史著 西海文化史研究所)

(同『国重要文化財指定記念誌 国重文の祇園橋』本渡祇園橋と町山口川の環境を守る会)



下浦町にある石工の「下浦石工発祥の地」碑と碑文



花岡大明神

明治十八年酉中春初日設立

この碑は、五郎左衛門没100年後に、地元石場の人たちが、遺徳を讃え、石工業の安全を祈願して建てました。

※近藤氏の石工の歴史と文化・潮騒H9 には、「明治十八年酉中春初日造建之」と記してあるが、初ではなく初。初はまつりの意